



心に残る患者さんと私の皮膚科医人生

森岡 眞治
森岡皮膚科医院・理事長

皮膚科医人生を振り返ると、大勢の患者さんの顔が走馬灯のように目に浮かびます。順天堂大学皮膚科に入局して以来、多くの患者さんと出会いました。その中でも一番記憶に残っているのは40代男性の菌状息肉症の患者さんです。

当時オーベンの小川秀興先生(現順天堂大学理事長)から免疫賦活剤が効かないものかのご指導を受けて、動物の線虫駆虫剤レバミゾールに免疫賦活作用があるとの基礎データをもとに、本人の了解を得て投与しました。すると劇的に奏効し、約1週間ですべての腫瘍は消失してしまいました。そのときの満面笑みの彼の顔がいまも脳裏に焼き付いています。残念ながら1年後には再燃悪化し旅立たれ、初めて死亡診断書を書きました。ちょうど、私の結婚前後のころで、結婚後に遅くまで仕事していると「先生、早く帰んなよ！ 新婚なんだからね」と諭されました。

レバミゾール治療前には、大量出血後の大量輸血でリンパ腫が治った症例があったとの先輩の話で、輸血室と相談し新鮮健常血漿に置き換えるバッグシステムによる血漿交換療法を行いました。菌状息肉症には無効だったのですが、この血漿交換のスキルが後の天疱瘡に対する血漿交換療法に続いたのです。論文を書くのが遅くなって、天疱瘡に奏効と本邦初の論文報告は京都の先生に先を越されました。小川先生に大目玉をくらったのですが、時間的にみると天疱瘡に血漿交換療法を実施したのは

たぶん私が最初だと思います。若手の皆さん、論文は早く書きましょう。

この血漿交換で大量入手した天疱瘡抗体を使つての天疱瘡研究が、当時の順天堂大学では活発に行われました。この研究実績により小川先生のご推挙により米国のラザルス先生のもとに留学させていただきました。

帰国後は水疱症専門外来を任され、多くの表皮水疱症の患者さんと出会いました。当時、劣性栄養障害型表皮水疱症患者さんには食道狭窄拡張術、癒着手指の指間形成術を教室プロジェクトとして積極的に行っていました。表皮水疱症の患者さんは身体的な障害はあるのですが、皆さん我慢強く心のきれいな努力家ばかりでした。

大学を離れ開業した後には、癒着した手に鉛筆を留めて書き送ってくれた年賀状や手紙には勇気をもらいました。ITやアニメ関係に就職できたとの報告や、念願の運転免許証が取得できたとの嬉しい報告もいただきました。ほとんどの方が亡くなりましたが、努力して臨床心理士の資格を取り、同病の患者さんの心のケアに頑張っている尊敬すべき方もおられます。

まとまりのない文章になりましたが、私に多くのことを学ばせてくれた患者さんとのエピソードの一部を紹介させていただきました。出会った患者の皆さんに感謝です。